「‘ならまち’における『庚申さん』」

The reason of KOSHINSAN in Naramachi

南 哲朗

（奈良町資料館　館長）

1. はじめに（序論）

〇奈良町資料館の取り組み

・幼稚園、小、中学校の校外展示場、奈良県や奈良市との国際交流連携などの取組み。

・地域密着型、町の資料館として大人も子供も楽しめる、世界遺産学習として地域教育協議会等連携、職場体験等。この論文のテーマは（庚申信仰；以降庚申さん）つまり庚申信仰の各地域（大阪、京都、福井、奈良）での取り組みや奈良町庚申堂と奈良町資料館の活動についてである。

庚申さんとは、江戸時代ごろをピークに日本全国に広まった民間信仰である。青面金剛を主尊とし、御堂や塔を建てその仏像や塚を祀ることで、人々は無病息災や厄除けなど、様々な願いを託したとされる。しかし、現代においてこうした庚申さんは薄れ、全国に庚申堂がいくつか残っているものの、その伝承や信仰は人々に忘れ去られてしまっている部分もある。今回各地域での歴史や活動をまとめ、考察を行うことで、今後庚申さんをより広い世代、また次の世代に伝えていくための一助となり、それらが地域ネットワークになると考えている。

2. 研究概要

（1）目的

各地区の庚申堂の歴史や活動をまとめ、その状況を比較すること、また現在の顧客層（今回は奈良町資料館に絞る）について認識し、今後どのような展開をしていくべきか考察することを目的としている。

（2）調査手法

庚申堂のある各地域（大阪、京都、福井、奈良）を対象に、これまでの歴史、現地での聞き込み、庚申堂関係者との交流を行った。また奈良町庚申堂と奈良町資料館を訪れた人を対象にアンケートも実施した。庚申さんの歴史については文献を参照した。

3. 結果から見えてきたもの

（1）現代の庚申堂

かつては 60 日に一度ある庚申日に徹夜をする行事、庚申待ちが行われていたが、四庚申堂の中で現在も徹夜をしている所はない。初庚申（その年の初めての庚申日）には、京都や大阪では護摩焚きが行われる。

現在の奈良町庚申堂は御開帳する日も庚申日でなく、同じ堂内に祀られている地蔵尊の縁日に御堂が開かれ、その際青面金剛像の姿を拝むことができる。

また庚申日にこんにゃくを食べるという風習が古くからあるが、こうした風習は現在でも各庚申堂に残っていることが分かった。庚申堂によってこんにゃくが提供されている所（京都・大阪）と、近隣の店舗によって提供されている所（福井・奈良）に分かれる。身代わり申も各地域に残っており、地域によって「くくり猿」「願い申」とも呼ばれている。ならまちの物は赤であるが、京都では様々な色の物がある。庚申信仰の行事は、現在は昔よりも簡略化しているものの、寺や地域の保存会などによって地域の重要な一行事として定着しつつあることが伺える。こうした活動は、庚申信仰の行事が廃れてしまった現在において、次の世代に庚申信仰について知ってもらうために重要なことであると考えている。

（2）アンケート結果

奈良町庚申堂と奈良町資料館を訪れた 130 名を対象にアンケートを行った結果は以下の通りである。女性の参拝客が圧倒的に多く、特に 50～60 代の女性が多く訪れていること
が分かった。男女とも 60 代が最も多く、若年層があまり訪れていない点が問題点として挙げられるだろう。どこから来たかという質問については中部、関東、関西のほぼ三つに分かれ、関西から来たと答えた人の 6 分の 1 が奈良の人であった。庚申信仰、身代わり申の知名度については、どちらも知らないと答えた人が 50%強で、館内や御堂に分かりやすい案内などを置くなどして、認知度を上げる必要があるだろう。奈良町を訪れたことがあるかという質問に対しては、対象者の 7 割以上がリピーターであるという結果が出た。これは非常によい強みであるだろう。奈良町という環境を気に入り、足を運ぶ観光客が多い中で、庚申さんをうまく絡めて紹介し、覚えて帰ってもらうことができれば、庚申さんの認知に関し貢献できるだろう。

（3）全国庚申フォーラム

2016 年 11 月 27 日に行った全国庚申フォーラムでは、各庚申堂関係者による
発表やパネルディスカッション、「庚申さん絵画展」の表彰、大学生の発表などが行われ、一時は会場が満席になるほどの盛況であった。このフォーラムを開催して得たことは、東大寺二月堂内庚申さんのルーツや他地域の新たな知見を得られたこと、又、資料やインターネットで知るだけでなく、庚申堂にかかわる人々の生の声が聞けたことで、何を大切に思い活動されているのか理解できたことである。お互いの歴史、文化に気づき、学び、考えるよい機会であっただろう。特に福井県の小浜庚申堂は、庚申堂で町興しフェスタを行うなど、地域と連携して積極的に活動されている。ならまちも小浜市と同様、観光地ではあるものの、町全体としては高齢化しており、町興しなどで若い世代や観光客を呼び込む必要があるため、学ぶところが多かったように思う。
また今回、広く人々に庚申さんについて知ってもらうための試みの一つとして、庚申さん絵画展を開催し、庚申さんについて触れてもらうための良いきっかけとなったと感じた。

図表 1　庚申さん絵画展

出所：筆者撮影

図表 2　庚申フォーラム

出所：筆者撮影

4. 全体考察

図表 3　庚申まつり（昭和 59 年）

出所：筆者撮影

これらの研ｃ究結果より、奈良町庚申堂には何があって、何が足りないのかが分かってきた。まず奈良町庚申堂にあるものは、こんにゃく炊きや身代り申といったものが周辺の店舗によってまかなわれているという点である。また関西からの顧客、高齢世代の女性顧客、リピーター顧客の多さもその良さであるといえるだろう。一方足りないものとしては、まず庚申縁日に大きな行事がないことである。

また東北・九州からの顧客数の少なさ、身代り申の知名度、男性顧客の少なさも挙げられる。そして最も重要な不足点は、若者世代の少なさである。広い世代、次の世代に庚申信仰を伝えていくための論と書いたが、前述の不足点はまだそうした世代に庚申さんについて伝えきれていないということを表している。これらの課題においては、各堂単位での活動のみならず、近隣の観光施設との連携や、小学校の歴史教育に取り入れてもらうなどの、外部との関わりが必要になってくるだろう。奈良町資料館では世界遺産学習と称して、庚申さんも含め、奈良の文化を若い世代に伝える活動を行っている。このように常に外部に働きかけ情報発信していくことにより、若い世代が庚申さんについて知るきっかけになるだろう。

また伝統文化を伝える為にも、全国庚申フォーラムのような、定期的に情報交換を行う場を設けることが重要であり、前述のように今後も何らかの形で継続していくことが必要であるだろう。

加えて、奈良町庚申堂を庚申日に御開帳する構想もある。“信仰“というより”伝承“という立ち位置で、数珠くりの様な古き良き文化を大人世代と子供世代で体験できる活動を行いたい。観光客の方々も体験でき、庚申さんを知るとともに旅の思い出になるような経験を提供できればと考えている。

5. おわりに

図表 4　世界遺産学習

出所：筆者撮影

庚申さんに深い関わりのある申年であった 2016 年、奈良町資料館として様々な活動を行ってきた。例年行っている山焼きや大文字鑑賞会、中学生の職場体験や世界遺産学習に関わるツアーに加えて、本年度は新しい試みとして全国庚申フォーラムを行った。庚申さんをより広い世代に伝えるためには、信仰として伝えるのではなく、地域の伝承、また地域の歴史に関わるものとして、切り口を変えて伝えていくことも時に必要であるように思う。

時代に沿って柔軟に対応していくことも必要である。誰もが情報を発信できる立場にある現代では、発信こそ容易であるが、情報量の多さから伝えたい人々、特に庚申さんについて知らない層へ正しい情報だけを伝えると言うことは難しくなっているのかもしれない。

庚申さんの理解を深めるためには、様々な行政、学校、機関と連携する努力も求められる。当資料館のスタンスである「観光と教育の連携」を念頭に、2017 年以降も庚申さんについてより広く知ってもらうために活動を続ける考えである。

6. 謝辞

本研究を進めるにあたり、ご指導を頂きました以下皆様に感謝致します。

筒井 寛昭	東大寺長老
村内 俊雄	奈良地域デザイン研究所代表、大阪経済法科大学 客員教授
大石 正	G&L 共生研究所　所長　奈良女子大学名誉教授
	奈良佐保短期大学前学長
池原 健二	G&L 共生研究所　GADV 研究室長
	奈良女子大名誉教授　(放送大学奈良学習センター 前所長)
岩井 洋	帝塚山大学　学長
牟田口 章人	帝塚山大学文学部文化創造学科教授
森栄 徹	大阪経済法科大学教授　(元読売新聞奈良支社長)
鹿谷 勲	奈良民俗文化研究所 代表
木村 都	元奈良佐保短期大学　教授
森下 博	福井県小浜市教育長
佐野 達也	福井県小浜西組町並み協議会地域活性化委員長
澤谷 欣弘	福井県小浜市庚申堂世話人会代表
奥村 真永	大黒山金剛寺八坂庚申堂　住職
山岡 武明	和宗総本山四天王寺　参詣課課長
河邊 啓法	和宗総本山四天王寺総務部参詣課
杉本 哲也	奈良県美術人協会員　奈良市立春日中学校教員

7. 参考文献

芦田 正次郎　(2012)『路傍の庚申塔―生活の中の信仰―』慶友社

飯田 道夫　(1991)『日待・月待・庚申待』人文書院

石上 裕之　(2013)『近世庚申塔の考古学』慶応義塾大学出版会

窪 徳忠　(1963)『庚申信仰の研究』帝国書院

庚申懇話会　(1978)『庚申　民間信仰の研究』同朋舎

五来 重ほか　(1979)『講座・日本の民俗宗教 3 神観念と民俗』弘文堂

新谷 尚紀　(2003)『なぜ日本人は賽銭を投げるのか―民俗信仰を読み解く』文藝春秋

地域デザイン学会　(2016)『地域デザイン No.8　特集　地域文化と地域経営』瀬戸内人

民俗学研究所　(1954)『年中行事図説』岩崎書店

柳田 国男　(1955)『年中行事覚書』修道社